

ミュージアムにおける紛争の語りをめぐる試論：和平合意後四半世紀を経た北アイルランドを事例として

FUKUI, Norie / 福井, 令恵

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

74

(発行年 / Year)

2024-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030839>

ミュージアムにおける 紛争の語りをめぐる試論：

和平合意後四半世紀を経た北アイルランドを事例として

法政大学キャリアデザイン学部 福井 令恵

1. 問題設定

本稿は北アイルランド紛争の表象を、ミュージアムの展示を通して考察するものである。ベルファスト和平合意締結後 25 周年にあたる 2023 年に、ロンドンの帝国戦争ミュージアム（Imperial War Museum）で、初の北アイルランド紛争に関する特別展示が公開された。さらに 5 年遡る 2018 年の 20 周年記念には、北アイルランドのアルスターミュージアムで、北アイルランド紛争に関する展示が公開された。このように近年、ミュージアムで北アイルランド紛争を振り返る展示が行われている。

ミュージアムは、集合的な記憶の形成の場のひとつである。記憶とは「過去を認識しようとするあらゆる試み、そしてこの営みの結果得られた過去の認識のあり方」であり、「数知れぬ過去の出来事を選択し呼び起こす行為、表象を媒介にした再構成の行為」である（小関 1999）。それは固定された過去を確認するという受動的な営みではなく、流動的であり続ける過去をどう捉えるかという、積極的認識の過程である（Lim 2021=2022: 370）。

記憶が構築される社会的な次元に焦点をあてたモーリス・アルヴァックスは、著書『集合的記憶』のなかで、記憶という現象を個人的現象としてではなく、他者とともに記銘し、他者とともに想起するという集合的な現象として捉えた。それは、従来支配的であった、記憶がどこかに保存され、それが再生されるというモデルを否定し、人は集団の一員として、過去を想起するという点に注目するものである（Halbwachs 1950=1989）。

アルヴァックスの理論を継承し発展させたのが、アライダ・アスマンとヤン・アスマンが提唱した「文化的記憶」の概念である。ヤン・アスマンは、アルヴァックスの論じた集合的記憶を「コミュニケーション的記憶」と「文化的記憶」という異なる様態に区別した。前者が短期の想起の共同体であるのに対し、後者は外在化された蓄積メディアと文化的実践を通してつくられた、長期的な記憶であり、簡単には揺らがない安定的・規範的な共同体の記憶である（Assmann 1999=2007, 安川 2008）。

アルヴァックスの主たる関心が、個人の記憶を基盤として生成する集合的記憶、すなわちアスマンの区分に従えば「コミュニケーション的記憶」にあるのに対し、アスマンの場合は、「文化的記憶」の分析に重点を置いている。アライダ・アスマンはさらに、「文化的記憶」の概念の精緻化を進め、集団内で過去との連続性を構築する文化のプロジェクトに常に内在する、想起と忘却のダイナミズムに注目する。すなわち過去を能動的・選択的に構築する文化のプロセスに焦点をあてる（Assmann 1999=2007, 安川 2008, 浜井 2017）。

こうした記憶生成のダイナミズムのなかで、社会の支配的な記憶に対する対抗的想起となる「記憶」の蓄積も進められる。近年オーラル・ヒストリーへの注目と周縁化されてきた人々の語りの集積がみられるが、これは記憶生成の場における交渉のひとつである。

ミュージアムは記憶生成媒体のひとつであり、さらにミュージアムの展示方法は「モノの展示」から、ミュージアムという場における「物語の生成」の重視に変化している（光岡 2017）。本稿では、和平合意締結後 25 年の現在、北アイルランド紛争についてどのような物語がミュージアムで生成されているのか、検討する。

2. 現代イギリスと戦争の記憶

北アイルランド紛争に関する物語の検討に入る前に、イギリスにおける戦争の記憶について確認しておこう。イギリスは、戦後の旧植民地からの大量移民の流入により増加した人種差別を減らすことを目的に多文化主義を導入し、自らを多文化国家として位置づけてきた。とはいえ、もともとイギリスは、イングランドがウェールズを組み込み、スコットランド、アイルランドと合同してできた複合

民族国家である。しかしイギリスの歴史の語りは、比較的最近までイングランドを中心とした連続的で均質なナショナルコミュニティの歴史の語りであった(Myers 2012)。

1990年代になるとイギリス社会ではエスニックマイノリティの社会的地位の向上がはかられ、それとともに従来マイノリティの貢献を含まなかったイギリスの歴史の語りを見直す「新しい記憶」の運動があらわれた(浜井 2017)。これまで歴史の周辺に置かれてきたエスニックマイノリティを、国家の歴史の語りに包摂する試みである。

周辺化されてきた集団を包摂するひとつの方法として、戦争での貢献の記憶の利用がある。国民としての意味のある共通の体験とみなされる「戦争」をめぐる記憶は、犠牲や苦難といった心情と結びつけられ、想像の共同体の結束の象徴となる(Anderson 1983=1997)。このエスニックマイノリティと戦争をめぐる記憶の関連で重要な展示——特別展示「戦争からウインドラッシュへ(From War to Windrush)」——が、ロンドンの帝国戦争ミュージアムで、2008年～2009年にかけて開かれた。この展示では、アフロカリブ系黒人の人々の戦争への貢献と、そうした貢献が彼らのイギリスへの移住といかに連続性を持つか示された(浜井 2017)。

イギリスは、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドからなる複合国家であることを先に述べたが、北アイルランド紛争に関してイギリスのナショナルな物語との関わりはあるだろうか。帝国戦争ミュージアムは、その名前が示すように、主にイギリスがこれまで関わってきた戦争を、ナショナルな枠組みで展示するミュージアムである。このミュージアムで、2008年～2009年にかけて開催された初の特別展示を検討することで、イギリスにおける北アイルランド紛争の記憶のあり方について考察したい。なお、北アイルランドにある代表的なミュージアムである、アルスターミュージアムの展示内容も参照する。これにより、紛争表象に関する課題を浮かび上がらせる。

3. 北アイルランドにおける二つの住民集団の対立の歴史

現在アイルランド島には連合王国を構成する北アイルランドと、アイルランド共和国の二つの国が存在する。イングランド／ブリテンによる長年の支配に対す

るアイルランドの抵抗の末、1922年にアイルランド島の東北部を除く南部 26 州に、アイルランド自由国（後のアイルランド共和国）が成立した。しかしながら、東北部の 6 州は連合王国にとどまった。植民地支配により、イングランド（およびスコットランド）からアイルランドへ大規模な入植が行われ、東北部には永続的なアルスタープロテスタントコミュニティがつくられ、彼らは連合王国との結びつきを重視していたためである。

アイルランド島の分断後、北アイルランドでは、南北アイルランドの統一を望むナショナリストと、北アイルランドが「イギリス」の一部として維持されることを望むユニオニストとの間に対立が生じた。北アイルランドでマジョリティであったユニオニストはナショナリストに対する差別政策を進め、これにより両者の対立はさらに深まり、紛争が勃発した。紛争の激化により、1972年にはイギリス政府は北アイルランドの自治を一時停止し、直接統治を敷いた。当時のイギリス政府の立場は、単なる両者の仲介者ではなかった。イギリス政府は北アイルランドの和平を模索し、和平合意案の提案に何度も関わったが、ユニオニスト（とりわけユニオニストのなかでもロイヤリストと呼ばれる強硬派）側の武装組織と共謀し、ナショナリスト側（強硬派のことをリパブリカンと呼ぶ）に攻撃を加えることもあった。

1990年代に入ると、ユニオニストとナショナリストの間に和解の兆しがみられ、1998年にはついにベルファスト和平合意が締結された。こうして武力による争いは、一応の終結を遂げた。

4. 事例

本稿で分析の対象とするミュージアムの展示は、北アイルランドのベルファストにあるアルスターミュージアムとロンドンの帝国戦争ミュージアムである。両ミュージアム共に、筆者が2023年9月に訪れた際の展示を分析の対象としている。

4.1 帝国戦争ミュージアムの常設展示

帝国戦争ミュージアムは第一次世界大戦中の1917年3月に設立された。20世紀初頭、世界の様々な地域で戦争博物館は設置されたが、そうした博物館は主と

して国を賞賛し、愛国心を育む場としての役割を担っていた。

しかし、20世紀末には「国境を越える」博物館があらわれた。本稿で論じる帝国戦争ミュージアムも戦争の実現や人間の愚かさを描くなど、展示方針が見直され、その姿勢が高く評価されてきた（剣持 2022）。帝国戦争ミュージアムの公共史部門長ジェームス・ブルジンは、敵と味方の区別なく人間としての経験を紹介することの重要性を強調し、展示品収集のために、日本を含む世界各国の歴史学者や博物館との交流を行っていると述べる（『毎日新聞』2023.01.08 東京朝刊）。

現在の帝国戦争ミュージアムの設立趣旨は、ミュージアムのホームページによれば、「軍の栄光を讃える記念碑としてではなく、軍服に身を包んだ人々や家庭の最前線で働いた人々の労苦と犠牲を記録することを目的に設立された」とある¹。時代変化を反映し、愛国心の涵養から戦争の現実や人間の愚かさを伝えるという趣旨の変化があり、例えば第二次世界大戦のセクションの展示を見ると、人々の暮らしに焦点が当てられている。

第二次世界大戦の展示の隣には、北アイルランド紛争の展示のギャラリーがあり、その奥にはフォークランド紛争の展示がある [図①]。北アイルランド紛争の展示は、主としてイギリス軍からみた北アイルランド紛争という視点で構成されている点に特徴がある。



図① ギャラリーマップ



図② ハンバー・ピッグ装甲車

まずこの部屋で目に入るのは、展示空間中央にある不審物の除去をする装甲車ハンバー・ピッグ (Humber Pig) の実物である [図②]。圧倒的なインパクトと存在感のあるこの車両は、北アイルランド紛争の事件として有名な「血の金曜日事件」で、イギリス軍のパラシュート連隊第一大隊によって使用されたものである。キャプションには、イギリス軍兵士にとっては、ハンバー・ピッグは「保護を提供」したのに対して、街の人々にとっては、「挑発的で抑圧的なもの」に映ったと記される。またハンバー・ピッグは、北アイルランドが「占領下にあることを常に思い出させる存在であった」ともあり、イギリス軍からの視点とともに、北アイルランドの人々にとってイギリス軍の存在がどのように捉えられたのかも短く説明されている。

この展示では、北アイルランド紛争に従軍した軍人の語りがオーディオで流され、「声」を効果的に活用している。「自分の故郷にいる人々となら変わらない(「同じように見える」) 人に対する任務」に対する戸惑いと困難を、「声」を用いて伝えている。

ただし、「銃後の暮らし」に焦点をあてる第二次世界大戦の展示とは対照的に、当時の「北アイルランドの人々の暮らし」は、ここではほとんど触れられていない。イギリス軍が出向いた先の「外部」での任務という視点に基づいており、ギャラリー隣の「外国」での紛争である、フォークランド紛争の展示との視点の共通性がみられる。同一国家に属している同胞のいる場所というよりも、外部で起きたことという捉え方である。

しかし、北アイルランド紛争はイギリスという国家「内部」の北アイルランドで起こった出来事であり、またイギリス政府は、紛争の時代には武装闘争へ関与した、北アイルランド紛争の「当事者」でもある。紛争が始まるとイギリス政府は、北アイルランド紛争を「国内問題」と主張し、アイルランド政府をはじめとした外部の関与を拒否した。こうした姿勢は和平プロセスの模索のなかで次第に変化し、北アイルランド問題を地域限定ではなくアイルランド民族の問題として考える「アイリッシュ・ディメンション」(「アイルランドの特性の尊重」と捉え、アイルランド政府などの関与を認めるという方針転換を行った。現在もイギリスの EU 離脱の際の国境問題をめぐる議論にみられるように、北アイルランドの問題は、アイルランド共和国や国際社会との協調が必要であっても、決してイ

ギリス「外部」の問題ではないのである。

こうした現実にもかかわらず、展示では北アイルランド紛争はイギリスの「外部」の出来事と位置づけられている。北アイルランド紛争は、同じ国内の〈我々〉の問題とは捉えられていない。空間的にも心理的にも切り離された社会の問題とみなされている。

4.2 帝国戦争博物館「Northern Ireland: Living with the Troubles (北アイルランド：紛争とともに生きる)」展

帝国戦争ミュージアムの常設展示が、ホームから遠い場所で起きた「外部」の紛争を、「イギリス」から見るという視点に基づいた展示であったのに対し、帝国戦争ミュージアムで2023年5月26日～2024年1月7日に開催された特別企画「Northern Ireland: Living with the Troubles」展は、北アイルランドの「人々の経験」を扱っている〔図③〕。帝国戦争ミュージアムでの北アイルランド紛争に関する初の本格的な展示は、5年をかけて計画され、北アイルランド紛争の知識を持たない来館者を主たる対象とした展示である。この展示は好評を博し、北アイルランドの主要紙のベルファスト・テレグラフ紙によれば、展示開始後3ヶ月時点で、帝国戦争ミュージアムの主催者の予想を大幅に上回る8万人以上が訪れたという (*Belfast Telegraph*, August 27, 2023)。

帝国戦争ミュージアムの担当キュレーターのクレイグ・マレー (Craig Murray) は、この企画について、次のように述べる。

英国内で起きた比較的最近の紛争であるという事実と相まって、ロンドンの帝国戦争ミュージアムで開催される「北アイルランド：紛争とともに生きる」展で、このテーマをどのように取り上げるかには、独特の困難が伴う。

ここでは、常設展示で見られる「外部」の出来事という捉え方ではなく、北アイルランド問題を正面から取り上げる決意と困難が述べられる。戦争をテーマにした代表的なミュージアムである帝国戦争ミュージアムで、北アイルランド紛争は和平合意後25年経った2023年まで本格的に取り上げられてこなかった。この点にも帝国戦争ミュージアムで、このテーマを正面から扱うことの困難がみてとれ

る。

マレーは特別展覧会のねらいを次のように語っている²。

北アイルランド紛争は複雑で多層的な紛争であったため、多くの人々がその原因や主要人物を理解するのに苦労している。帝国戦争ミュージアムがこの展覧会を開催する理由は、この紛争を理解するための障壁を取り除くことにある。

北アイルランド紛争の理解に対する障壁を取り除くために、実際にどのような展示が行われたのだろうか。マレーによれば、この展覧会では葛藤の物語に重点を置き、紛争に巻き込まれた人々の生の声を録音したオーラル・ヒストリーの採用が、早くから決められていたという。様々なバックグラウンドを持つ北アイルランドの人々の語りを聞かせるスタイルで、複数の視点を提示することを最重要視している。また、各セクションでは、「キュレーターの視点 (Note from the Curator)」と書かれたパネルがあり、展示品とともにキュレーターの見解が加えられる方式も採用している³。「キュレーターの視点」にも記されているように、この展覧会では各人の語りの判断は来館者に任せられている。

展示は、5つの部屋から構成され、年代順ではなくテーマ別に展示されている。



図③ 特別企画「Northern Ireland: Living with the Troubles」展

来館者は、北アイルランド紛争の概要を伝える短い映像（イントロダクション）を最初に見た後、4つのセクション——「1970年6月27日～28日の夜」「暴力への転落」「『小さな場所（wee place）』の地獄」「現在と未来」——を進んでいく。

以下、各セクションの展示内容を述べておく。

【イントロダクション映像】

展示室の入り口すぐ、正面には北アイルランド紛争の概要を説明する映像が流されている。ここで北アイルランド紛争を知らない来館者に、北アイルランド紛争を伝えるための情報が、コンパクトにまとめられ提示される。映像で示される説明は、2023年現在から時代を遡って説明していく方法が取られる。

1998年のベルファスト和平合意に触れた後、北アイルランド問題の起源として1603年に「植民地主義が始まる（Colonisation begins）」と述べられる。次に1916年にブリテンの支配のもと（Under Control of Great Brian）、アイルランドでは「イギリス軍の一員として奉仕する一派」と、「独立を目指す一派」に分裂し、1918-1921年の戦いを経て、アイルランド自由国と北アイルランドが成立したことが説明される。1922-1923年には日愛条約への賛成派と反対派の戦いがあり、それを経て国境が確定した、とアイルランド島に二つの国が存在する状況を伝える。その後、北アイルランドに焦点が絞られる。1968年の公民権運動の高まりと、アルスター警察とロイヤリストの一部が公民権運動のデモ隊を攻撃し1969年に衝突が起こったこと、そして対立の激化のなか、準軍事組織が力を持ち、紛争へと至った、と紛争勃発の説明がされる。

このように短い説明で、端的に北アイルランド紛争を伝える内容になっている。こうした工夫の一方でアイルランド分割の背景の説明や、なぜ公民権運動の高まりがみられたのか、その理由の説明は省かれている。

【1970年6月27日～28日の夜】

1970年6月27日から28日にかけて、ベルファスト市内東部のセント・マシュー教会で起こった銃撃事件に焦点をあて、北アイルランド紛争を詳しく検討する内容になっている。ナショナリスト（リパブリカン）とユニオニスト（ロイヤリスト）が衝突し、死者と負傷者を出した。なぜこのような事件が起こったの

かをめぐるっては、リパブリカンとロイヤリストのコミュニティで現在まで論争が続いている。この展覧会を通して見聞きすることが、〈紛争後〉の現在も争点となっていることを、来場者に印象付ける。

この事件を取り上げることになった経緯は、以下のように説明される。

東ベルファストのウォーキング・ツアーに参加した際に、この展覧会を、論争的となっている出来事を中心に構成することを思いついたのです。

キュレーターは、数年前にこの事件に「出会った (encountered)」と語り、論争的ではあるが、紛争に関して相反する立場の人たちが、自分の意見を話すことが重要だと述べる。

【暴力への転落】

このセクションでは、ギャラリーの壁にパネルが多数並べられ、そのパネルに多くの語りが紹介されている。北アイルランドの人々の紛争への関与の仕方、当時のコミュニティの状況、そのなかでの個人の意思や考え方の関係を考えさせるものである。具体的には、イギリス軍や準軍事組織の一員として北アイルランド紛争に関わった人物がなぜ組織に加入したのか、紛争の時期にどのような経験をしたのか、準軍事組織の元メンバーはイギリス軍をどのように見ていたのか、地域コミュニティでは準軍事組織をどう見ていたのかなどが語られる。

さらにここでは、紛争の時代に地域で描かれていた、紛争に関わる壁画の映像が流される。また買い物などで外出の際にチェックポイントが至る所にあり、そうしたチェックを受けることが日常となっていた当時の住民の暮らしも、映像で映し出されている。

こうした複数の声により、北アイルランド紛争になじみがない来館者に対して、当時の北アイルランド社会の雰囲気や伝え、一面的で単純な物語に回収されない展示となっている。

【「小さな場所 (wee place)」の地獄】

さらに、ここでは「プロテスタントとカトリック」「ロイヤリストとリパブリカ

ン)「イギリス軍とIRA」といった、二項対立ではない視点の提示が行われている。いくつか挙げておくと、以下のとおりである。異宗派間の婚姻(mixed marriage)をした人が、当時どちらのコミュニティに住んでも、そのコミュニティで「よそ者」とみられるという経験をしたという語り。元準軍事組織(IRA)のメンバーが語る、刑務所での経験をもとに、そこで収監されていたのは、共に「労働者階級の人」であり、そこに北アイルランドの現実があると認識していたという語り。とりわけ性的マイノリティの人々への差別が苛烈だった北アイルランド紛争時、当事者がどのように暮らしていたのか(身近な人とはまったく紛争の話をしなかった)という語り。コミュニティトランスフォーメーションのメンバーの語り(両コミュニティとも自分たちを「被害者」とするが、それは誤りである)などが紹介される。

キュレーターは展示のねらいを次のように説明する。

北アイルランドの人々の「普通」が、マンチェスター、リーズ、レスターといった場所に住む人々には認識できないものであったことを、来館者に理解してもらいたいと思う⁴。

準軍事組織のIRAは紛争時イングランド各地で爆弾攻撃を行っていたが、攻撃を受けた都市に住む人々にも、北アイルランドの人々の日常生活は理解されないものだった点が、ここでは強調されている。このように、様々なアクターの経験や視点を見せる工夫がみられる。

【現在と未来】

簡単な歴史紹介から始まり、紛争に関連する資料が展示された後、展覧会の最後を飾るのは、北アイルランドの未来に対する希望と不安を語る人々の声である。現在のベルファストの映像が上映され、今の暮らしや社会状況に関する意見が述べられる。

ここまで見てきたように、北アイルランド紛争の理解への障壁を取り除くために、以下の方法が採られている。

ひとつは、北アイルランド紛争が複雑で多層的な紛争であり、来館者にとって理解が難しいという認識のもと、最近現地に出かけてツアーに参加したというキュレーターの「個人的な紛争との出会い」を前面に出すというアプローチである。北アイルランド紛争を知らない来館者と同じ目線に立ち、紛争を様々なかたちで経験した人々の声を聴くというアプローチにより、紛争に出会い、北アイルランド紛争の理解に近づこうというものである。

第二に、展示されたモノを常設展のそれと比較すると、日常生活との関わりを示すものを中心としている点である。紛争中に収監された囚人が当時刑務所内で作成していたハンカチや、危険なので道ばたにあるものを拾わないようにと子どもたちに警告する、リスのタフティのキャラクターのポスター [図④] などが展示された。

このように、人々の紛争当時の暮らしや経験を伝える工夫がされている。これはイギリス軍の視点や、北アイルランド紛争のシンボリックな記号を取り上げている常設展示とは、対照的である。他方で、様々なアクターからなる複数の声が紹介されるものの、対立の背景の説明は少ない。北アイルランド紛争が「多層的」で「複雑」である点が伝えられる一方で、対立の背景の深い理解を促すには至らない。来館者には複雑で理解困難という認識が残る可能性が高い。

それでは、紛争の影響を色濃く残す現地の北アイルランドにあるアルスター



図④ 子どもへの注意喚起のポスター

ミュージアムでは、どのような紛争表象が行われているのだろうか。

4.3 アルスターミュージアム「The Troubles and Beyond (紛争とその先)」展

ベルファスト和平合意締結 20 周年を記念して 2018 年の聖金曜日に、アルスター博物館は新たな常設展示「The Troubles and Beyond」を公開した。アルスターミュージアムのホームページによれば、多様な視点と経験を反映した展示品を通じて、北アイルランド紛争の歴史を探ることを目的とした展示である。展示品の多くが一般の人々から寄贈されている。展示品のコレクションについては、以下のように説明されている。

私たちのコレクションは、政治と紛争が、日常生活・人々・コミュニティに与える影響をテーマにしています。「The Troubles and Beyond」展は、紛争だけに焦点をあてたものではなく現代史に関連しているため、より広い社会的、文化的、経済的歴史を代表するオブジェクトが含まれています。コレクションはダイナミックなものであり、コレクションの構築と開発に常に取り組んでいます。

北アイルランドは紛争のイメージが強いが、紛争時代の北アイルランド社会もまた他の社会と同様、オイルショックや世界的な産業構造の変化、技術革新、ポピュラーカルチャーの勃興といった社会変化に影響も受けてきた。「The Troubles and Beyond」展は、10 年ごとの時系列に展示がまとめられており、紛争や政治史に関する展示だけでなく、当時の北アイルランドの人々の社会生活や文化生活を示すことにも力点が置かれている。

まず年代に関しては、主として公民権時代から現在までの社会的、政治的、文化的影響を展示するものになっている。[1923-1968 年] の展示では、イギリスが「福祉国家」へと転換し、北アイルランドでもその恩恵を受けて高等教育を受けられる層が広がったこと（特に「カトリック」が良い教育を受けられ、職業の選択肢と雇用が広がった点）、高い教育を受けた人々が、北アイルランド社会の平等の実現のためさらなる改革を求め、両者の緊張が高まったことが説明される。次に [1970 年代] のセクションでは、当時大変な人気を博していたロックバンドの

レッド・ゼッペリンの、アルスターホールでの「天国への階段」のライブ初演について、取り上げている。この後、北アイルランドにおけるエンターテインメントは少なくなった、と説明があり、紛争が与えた文化面での影響を伝える。また[1980年代]では、サッチャーや、レーガンの政権、ベルリンの壁崩壊、北アイルランドでのハンガーストライキ闘争などが起こった時代であることが説明される。[1990年代]のセクションでは、和平プロセスの説明と共に、インターネットの人気(およびモバイルテキストの普及)、レイブカルチャーなどが取り上げられる。このように、紛争時代の北アイルランドを、より広い世界や社会的文脈に位置づけ、そのうえで、北アイルランドの人々が紛争当時、どのように暮らしていたのかを浮かび上がらせる。

さらに人々の暮らしを示す展示品の種類・内容は、多岐にわたる。入口すぐの壁には、ベルファストのロイヤリストとリパブリカンのコミュニティで、それぞれ多数の壁画を描いてきた壁画家である、デイビット・クレイグとダニー・デバニーの手による、神話の英雄クフーリンをテーマにした作品が飾られる [図⑤]。パネルには、“While we have a shared past, we do not have a shared memory”と説明書きがあり、北アイルランドでは記憶の問題が課題となっていることが示される。壁画が労働者階級の居住区で発展した文化であるのに対して、ファインアートの作品も見られる。紛争をテーマにしたファインアートは、北アイルランド紛争の時代、ほとんど世に出ていなかったが、紛争を正面から取り上げたパイ



図⑤ 壁画家が描くクフーリン像
(左がダニー・デバニー作、右がデイビット・クレイグ作)



図⑥ 「Peace Talk 1992」
(ジャック・パケナム作)

オニア的なアーティストである、ジャック・パケナムの作品「Peace Talk 1992」が展示されている [図⑥]。また、紛争激化以前の時代に活躍した、画家ウィリアム・コナーの油絵 (The 36th Ulster Division at the Cenotaph) の展示もある。コナーは、ロイヤリスト／ユニオニストの代表的なコミュニティであるシャンキルコミュニティ近くで生まれた画家で、労働者階級の生活を温かい視点から描いている。壁画からファインアートまで、幅広くコレクションされている。

もちろん、より直接的に紛争に関わる展示品も多数ある。ごく一部ではあるが例を挙げると、紛争時に住居に火炎瓶を投げ込むことで、対立側のコミュニティの住人の追い出しをはかることが頻発したが、1973年ボンベイ・ストリートで起きた事件は、紛争初期の時期のそうした出来事であり、現在も北アイルランドのコミュニティで記憶されている。この攻撃により、この家の家族は去らなければならなくなったが、その際運び出したテレビの現物が展示される [図⑦]。また紛争の時代に、襲撃を受ける可能性が高い人に配布された冊子の実物も、北アイルランド紛争での悲劇を直接的に示す展示である。

政治史に関わる展示品は多いものの、ロイヤリスト／リパブリカンやユニオニスト／ナショナリストといった対立軸による政治だけではなく、コミュニティを横断する女性の政治組織や、紛争時にはとりわけ差別的な扱いを受けてきた性的マイノリティの活動も取り上げられる。[図⑧]は、こうした組織に関わる展示品である。

展示品は、このように非常に多種多様であり、内容も紛争と深く関わる北アイ



図⑦ ボンベイ・ストリートで焼け出された家から運び出されたテレビ



図⑧ 北アイルランド女性連合 (NIWC) のポスター

ルランドの人々の暮らしの文化・経済・歴史・社会的側面を、包括的に取り上げている。しかし多種多様な展示品にも関わらず、アルスターミュージアムは、「この空間・展示品には、限界がある。何か欠けているものがあれば、教えてほしい」と呼び掛けており⁵、コレクションのさらなる充実を目指している。

5. おわりに

ここまで見てきたように、帝国戦争ミュージアムの常設展と特別展、アルスターミュージアムの展示における北アイルランド紛争の表象を検討してきた。誰に向けて、どのような展示がされ、いかなる物語が伝えているかと問うとき、帝国戦争ミュージアムの常設展示では、北アイルランド紛争を知らない来館者に、主としてイギリス軍の視点から、外国での紛争と同じ枠組みで出来事が伝えられる。帝国戦争ミュージアムの特別展は、複数のアクターの経験を取り上げて、紛争の多様な見方を提示している。複雑な問題がある点を伝えるものの、それぞれが断片的な語りにとどまっている。したがって、北アイルランド紛争は、自分たちから遠い世界の、「彼ら」の経験という視点は揺るがず、イングランドをはじめ、北アイルランド以外のイギリスの各地に住む我々もまた「関係者」だという視点は弱い。

アルスターミュージアムでは、紛争当時の北アイルランド社会を、紛争一色ではなく、より広い歴史・社会的な文脈に位置づける。アルスターミュージアムでは、紛争時から現代に至るまで、北アイルランドの人々の生活を文化活動や社会生活とともに描きだし、紛争下で生きることを示している。とはいえ、この展示で見えてくるものは、北アイルランドに住み、紛争を経験した人のなかでの、経験の共有・記憶の共有の難しさである。

本論文では、地域コミュニティによって設立された、北アイルランドにある複数のミュージアムの紛争の展示については分析していない。またミュージアム間の関係、市民が関わる諸組織とミュージアムの展示の関係についても、検討を加える必要がある。ミュージアムという場での記憶の生成を精緻に分析するにはこうした点は重要だが、稿を改めて論じたい。

*本研究は JSPS 科研費 JP23K11657 の助成を受けたものである。

注

- 1 Imperial War Museums, 2024, Imperial War Museums Homepage, (Retrieved January 5, 2024, <https://www.iwm.org.uk/history/who-set-up-the-imperial-war-museums>).
- 2 イギリス博物館協会 (Museums Association, UK) のサイトに掲載されたマレーのオピニオン記事 (Retrieved January 6, 2024, <https://www.museumsassociation.org/museums-journal/opinion/2023/07/the-story-of-the-troubles-must-be-told-by-the-people-who-lived-through-it/>).
- 3 「キュレーターの声」のパネルが展示されたのは、帝国戦争ミュージアムで初めてのことである。(Retrieved January 6, 2024, <https://www.museumsassociation.org/museums-journal/opinion/2023/07/the-story-of-the-troubles-must-be-told-by-the-people-who-lived-through-it/>).
- 4 原文は以下のとおりである。I want visitors to appreciate that their 'normal' was something unrecognisable to someone in Manchester, Leeds or Leicester.
- 5 展示室のパネルに記載があり、目立つようになっている。

文献

- Anderson, Benedict, 1983 [1991], *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso, Revised Edition. (=白石さや・白石隆訳, 1997, 『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版.)
- Assmann, Aleida, 1999, *Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses* München: C. H. Beck. (=安川晴基訳, 2007, 『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』水声社.)
- Halbwachs, Maurice, [1950] 1997, *La mémoire collective*, Paris: Albin Michel. (=小関藤一郎訳, 1989, 『集合的記憶』行路社.)
- 浜井祐三子編, 2017, 『想起と忘却のかたち: 記憶のメディア文化研究』三元社.
- 剣持久木, 2022, 「戦争博物館の最前線」『軍事史学』57巻4号.
- 小関隆他編, 1999, 『記憶のかたち——コメモレーションの文化史』柏書房7頁.
- Lim, Jie Hyun, 2021, *희생자의식 민족주의 (Victimhood Nationalism)*, Seoul: Humanist Publishing Group. (=林志弦著・澤田克己訳, 2022, 『犠牲者意識ナショナリズム——国境を超える「記憶」の戦争』東洋経済新報社.)
- 光岡寿郎, 2017, 『変貌するミュージアムコミュニケーション』せりか書房.
- Myers, Kevin, 2012, 'Cultures of History: The New Left, South Asians, and Historical Memory in Post-War England', in Irial Glynn and Olaf J. Kleist(eds), *History, Memory and Migration: Perceptions of the Past and the Politics of Incorporation*

72 法政大学キャリアデザイン学部紀要第 21 号

New York: Palgrave Macmillan pp. 33-34.

安川晴基, 2008, 「『記憶』と『歴史』: 集合的記憶論における一つのトポス」『藝文研究』 94: 282-299.

ABSTRACT

Exhibiting Conflict in Museums: A Case Study of Northern Ireland After 25 Years of Peace Agreement

Norie FUKUI

This paper examines the representation of the violent conflict in Northern Ireland, known as the Troubles, through exhibitions at two museums: the Imperial War Museum and the Ulster Museum. One is the “Northern Ireland: Living with the Troubles” exhibition, which was unveiled at the Imperial War Museum in London in 2023, marking the 25th anniversary of the Good Friday Agreement. While the Imperial War Museum has a small permanent exhibition section on the Troubles, this special exhibition is the first at the museum specifically dedicated to the conflict in Northern Ireland. The other museum is the Ulster Museum in Belfast, where the exhibition “The Troubles and Beyond” was opened in 2018 to commemorate the 20th anniversary of the peace agreement.

In the Imperial War Museum’s exhibition, the Troubles is presented as an external conflict to British society, positioning it as a conflict experienced by “them” as opposed to “us.” However, the special exhibition differs from its permanent exhibition regarding the conflict representations in that it addresses the diverse perspectives of multiple actors involved in the conflict.

The Ulster Museum depicts the lives of people in Northern Ireland from the time of the conflict to the present day—including their cultural activities and social life—showing what it is like to live with the conflict. What becomes evident in the Ulster Museum’s exhibition is the difficulties of sharing

experiences and memories among those who lived and experienced the conflict in Northern Ireland.